1978年度春季研究発表会

1978年から春季研究発表会を各支部で開催することとなり，5月31日(水)，6月1日(木)，札幌市・教育文化会館にて行なわれました．この大会は北大工学部精密工学科三浦良一教授を実行委員長とする計12名の実行委員によって準備されました．以下その報告をお届けします．

概括　今回の特別テーマは「エネルギー問題とOR」で7件の応募があり，第2日目に発表していただきました．この他に特別講演2件，自由討論会2件，研究部会報告と一般テーマ合せて100件の発表がありました．

出席者は正会員164名，学生会員38名，賛助会員23名，非会員22名，計247名でした．

第1日目は悪天候が幸い(？)して各会場・特別講演・自由討論会ともに出足良く，議論も盛んでした．第2日目は美わしき札幌の6月となったものですから，出席者の数はやや減りましたが，討論は活発でありました．

第1日目夕刻，電信電話会館で出席者63名を得て懇親会が開かれ，終刻になっても談話が弾んで止まぬ盛会でした．なお，会期中，支部長会議および理事・フェロー会議が開かれました．6月2日は総勢32名にて札幌市内名所観光へ繰り出しました．

特別講演は5月31日午前に開催，北大工学部五十嵐日出夫教授により「北海道の交通―とくに過疎地の交通について」，同農学部黒柳俊雄助教授により「北海道経済の現状と特質」が論じられました．本邦における新規開発の最後のフロンティアといわれる北海道の未来を考えるのに貴重な講演でありました．

研究発表は，特別テーマ，部会報告，一般発表と4会場にわかれて行なわれ，いろいろバラエティに富んだテーマが取り上げられ，座長各位の司会よろしきを得て議論に花が咲き，かつ手際よく進行したもようです．一時期，室の収容能力と出席者数が整合しない会場がありましたが，ご勘弁ねがいたく．

自由討論会ははじめての試みで，「学会の在り方について」と「OR実施理論の新しいフレームワーク」の二つが行なわれました．出席者一同にアンケートが配られ，すぐ結果が示されるなどの新演出や，日本的ORについて広く意見を求めるなど，それぞれ工夫がこらされ，成果をあげたものと評価されます．ただ，テーマや件数によってはプログラム編成上面倒な問題となります．

反省と謝辞　自由討論会とともにペーパー・フェアの変種として計画した“研究資料展示場”は応募者がなくわれわれシャイな日本人にはとりつきにくかったようです．けれどもペーパー・フェアの精神は本来このような場にあったのではないでしょうか．おわりに，発表会開催の万端に努力された関係者一同，多額の寄付と支援を賜わった北海道電力，電々公社，国鉄道支社，北海道拓殖銀行，および札幌市に厚く感謝の意を表します．

(実行委員　浅利英吉)

聞き歩きの記

薄紫色のライラックの花は，七分咲きなのか満開なのか，あるいはまた盛りを過ぎたのかがわかりにくい花だな，などと考えながら大通り公園をずっと西に歩いていくと，それがほぼ終わるあたりにOR学会春季研究発表会会場の教育文化会館はあった．6月の札幌での学会というせいか参加者は結構多かったようである．筆者が参加，聴講したうちのそのまた一部についてちょっと印象めいたことを記してみることにする．

まずは学会第1日目B会場第1コマは中森氏（東京農工大）の「内的および外的単体マトロイドの性質について」である．聴衆が総勢14～15名というのは第1日目早朝のせいか，あるいはまた題目の響きが“理論的(？)”すぎるせいかはわからない．いずれにしても“マトロイド”という言葉がまだあまりなじまれていないことは事実のようである．アブストラクト集にはベースの公理からはじまって内的あるいは外的マトロイドの定義とそれが公理を満たすことが書いてある．研究発表のほうでは線形計画法の多面体の話とちょっとした関連をつけて話されたようだが，そちらの方面から話を進めていたほうがおもしろいのではなどと思っているうちに終わってしまった．そしてつぎは田口氏（東京大学）の連続体における最短径路問題―大規模な回路網流れ問題の近似解法―の話である．容量，距離等の概念の連続体上への拡張とその近似解法がなぜ必要なのか，それがどれほど効率的になりうるのか，またそれをどう解釈しうるのか，離散型の場合とどういうふうにどのくらい異なるのか，というかなり根本的なあたりがよくわからないのは前回の同氏の講演を聞けなかったせいだろうか．おもしろい問

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

題なのだろうがむずかしいのであろうと思いながら聞いていた．そして筆者は，この日の有効な“あき時間”を見つけて石狩川河口にあたる石狩町へのドライブと決め，利根川を見なれている小生にとっては思ったより狭い川幅の石狩川と，黄土色に近いような何ともいいようのない色をした日本海とを眺め，漁網の整備をしている漁師夫婦と語り，彼らの生活パターンが，そして生活観が東京のわれわれとは（同じ魚類を食べているにもかかわらず）まったく異なるものであることを実感で味わってきたのであります．

そして翌日は，特別テーマであるエネルギー問題とORの会場へ．エネルギー問題は国際的なだけに話はすべて大きい．NO_x 排出量削減の燃料需給への影響，発電容量拡大政策最適化モデリング，世界エネルギーモデル，エネルギー価格上昇のインパクト分析，エネルギー問題とORなどである．OR的とまではいわなくても，モデルによる分析に関しては，ただこういう手法でこれこれの前提でこういう結果が得られるというだけではなく，おのおのの分析がどういう目的，特徴を有し，それを駆使し詳細に分析することによって何がいえるのか，どういう解釈ができるのかをかなりつきつめて分析することが必要なのではなかろうかという印象をもった次第である．そのような方向までは得られなかったようであるが，浅利氏（東海大学）の「亜寒帯水稲栽培における太陽エネルギー利用の合理化について」が聴衆の興味をひいたのは，“受熱田”なるものの話題としての目新しさのせいであろうか．そしてその日の午後は同会場でのスケジューリング，組合せ整数計画を聞く．ある種のスケジューリング問題，ラインバランス問題，ビンパッキング問題，順序づけ問題，集合分割問題などに対する分枝限定法等のアルゴリズムの話がほとんどあった中では，最近アメリカ，カナダあたりで関心を集めている「整数計画問題の許容領域の記述に要する不等式数」の問題をサーベイ的に解説した茨木氏（京都大学）の話などはよくまとまっていたようである．また関口氏（北海道大学）の「Tree Programming と分枝限定法の等価性」も分枝限定法モデルをちょっと異なる点から眺めようとする点で新しく思われた．

以上，筆者が聞き歩いたうちの一部の研究発表について印象めいたことを思いつくままに書いた．かなり内容的に偏ったかも知れないことはお許し願いたい．OR学会春季研究発表会聞き歩きの記とでもしてもらって，これで終わることにする．

（大山達雄）

大会ルポ

機長の，札幌の気温は摂氏7度のアナウンスに，まばらな乗客の中から微かなざわめきが起こる．絶好の学会日和である．千歳から札幌に向かう車窓一面にこぼれる蕗の傘などさぞ風流なと考える余裕を楽しむことなく，すでに大会のはじまっている教育文化会館に赴く．経験の浅さ故の誤解かも知れないが，大会会場のイメージとおよそかけ離れた近代的な造りにまず怯え，OR会場であることを確認して足を踏み入れる．

会場では北海道大学の五十嵐日出夫氏と黒柳俊雄氏の特別講演がはじまらんとしていた．両氏ともに熱演で，北海道の特質が浮き彫りにされ興味深かったが，五十嵐氏の「北海道の交通—とくに過疎地の交通について」では，日頃われわれの多くになじみの薄い過疎の問題が提起され，その深刻性にもかかわらずあまりOR屋の攻撃目標とされていない現状が訴えられていた．実にORの駆使されるべき対象であり，今後の活躍が待たれる．

午後と2日目は不真面目ながらもいくつかの研究発表を覗いてみた．ゴッドファーザー的存在で部下を大勢率いて会場に乗り込み，部下に質問が発せられると真っ先に矢面に立たれる方，発表時間が過ぎても頓着せずにあと何分と尋ね，それを知らされても悠然と発表を続けられる方，自信満々で聴衆をジャガイモかトウモロコシかのように思って発表される方等々各人各様で，内容よりもそちらのほうに気を取られてしまった．そのような心情でいながら，とび抜けた発表は見当たらなかったなどとぬかすのは甚だ失礼であり，したがって内容に関する感想は差し控えさせていただくことにする．どだい，私は黒板愛好家であり，プロジェクターに映し出される分刻みで変わりゆく光景は，私のような凡人にはただ頑張ってますね，ほどの感慨しかもち得ないのである．

前回の広島の発表会は試行的にアブストラクト4頁，発表時間30分で行なわれ，アンケート調査（有為と見なされるほどのサンプル数であったかどうかには疑問が残るが）によれば，その評判は結構よかったと記憶している．今回再び従来の形式にもどったわけであるが，もう一度検討し直す必要があろう．私個人の好みでは，件数を制限しても内容をじっくりという方向に進んでほしい気がする．

盛況であった松田武彦氏（東工大）の自由討論会の席上，巧遅より拙速がましという意見が出ていたが，拙遅とだけはいわれぬよう，この原稿を締切りに間に合うべく書いている次第である．

（鳩山由紀夫）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．